

[028_1986]第二十八回中央図書館貴重文物展観目録 ： 古典派経済学の形成・展開と初期社会主義思想

九州大学附属図書館中央図書館

関，源太郎
九州大学経済学部：助教授

<https://doi.org/10.15017/1485016>

出版情報：大学広報. 567, pp.1-8, 1986-05-26. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報

№.567

昭和61年5月26日発行

(編集)

九州大学広報委員会

第二十八回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

古典派経済学の形成・展開と初期社会主義思想

は じ め に

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については経済学部荒牧正憲教授及び
関源太郎助教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

記

展観場所 : 中央図書館メインロビー

展観期間 : 昭和61年6月3日(火)から

昭和61年7月31日(木)まで

展 観 資 料 の 解 説

1 Smith, Adam. – Essais philosophiques ; précédés d'un précis de sa vie et ses écrits; par Dugald Stewart. Traduits de l'anglais par P. Prevost. Pt. 1-2. Paris, 1797.

アダム・スミス（1723 – 90）はスコットランドのカーコーディに生まれ、母校グラスゴウ大学の教授、若きバックルー公爵の大陸旅行の家庭教師、スコットランド関税委員などの職にあった。本書は、彼の死後 1795 年に友人のブラックとハットンにより出版された『哲学論文集』の仏訳版である。スミスは亡くなる数日前彼らに遺言依頼した草稿類の消却を実施させたが、本書に収められたものは彼らにその処分を一任したという。その意味でも本書は、スミスの学問体系を理解するために重要でありまた貴重である。内容は、天文学史、古代物理学・論理学、学問芸術論、外部感覚論など多岐に亘るが、その中心テーマは認識論、科学方法論にある。とりわけニュートン力学が重視されている点が目をひく。彼の二大著作、『道徳感情論』『国富論』の世界も、こうした広くて深い思索と洞察の上に構築されているのである。

2. Smith, Adam. – The theory of moral sentiments; or, an essay towards an analysis of the principles by which men naturally judge concerning the conduct and character, first of their neighbours, and afterwards of themselves. To which is added, a dissertation on the origin of languages. Vol. 1-2, 6th ed., London, 1790.

商品経済の展開が封建社会の社会秩序を解体した後、近代人が形成する近代的な社会秩序の認識が模索された。このイギリスを中心とした西欧における思想潮流の中に本書は位置する。これ以前には近代市民社会の秩序形成の要を、外的な政治権力や公共社会の秩序がもつ効用、あるいは人間の仁愛的行動に求めていたが、スミスはその方向を転換させ、普通の人間同士の織りなす関係そのものから近代市民社会の秩序を認識しこれを仕上げた。それによれば、普通の人間の間の交通から自然に形成される正義がこの社会の大黒柱であり、仁愛は装飾品にすぎない。また、公共社会の秩序の効用はその結果であって原因ではないことになる。こうして正義を軸に近代市民社会の自律性が発見され唱道される。ところで、本書の初版は 1759 年に刊行され、本書（6 版）は最終的な改訂・増補が施されている。この点に注目すると、『国富論』を著すことによって得られたスミスの重商主義末期に対する歴史認識の拡大・深化が本書に——特に徳性論の中に読みとれる。この点にも本書の意義がある。

3. Smith, Adam.—An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. Vol. 1-2, London, 1776.

本書の出版時に、既にイギリスでは産業革命は始動し、アメリカ独立革命も進行中であった。重商主義末期の時代である。重商主義の経済システム・経済政策の批判と経済自由主義の主張に本書の狙いがある。重商主義の下では、一部の上層の人々の経済的繁栄が多数の中・下層の人々犠牲の上に築かれ、国際的にも対外戦争をくり返すことになるからである。本書は重商主義的思考を拒否し、富を消費財と把握する。その上で富を作出する近代的生産力機構が分業と資本蓄積を軸に価値の法則に過程し自律的に展開する再生産過程として解明される。経済をみる目が流通から生産一般へ拡大・深化され、生産が出発点、中心とされる。こうして経済を全体的に捉える基礎がすえられ、本書は様々の不十分さを残しつつも、古典派経済学の出発点となった。と同時に、ここで得られた知見はまたスミス自身によって『道徳感情論』6版でも生かされている。スミスの学問体系は、各々が固有の領域をもちながら、倫理学（人間関係論）、法学および経済学から成る壮大な道徳哲学＝社会科学体系であることが注目される。

4. Ricardo, David.—The high price of bullion, a proof of the depreciation on bank notes. 4th ed. corrected. To which is added, an appendix, …… London, 1811.

デイヴィッド・リカードウ（1772—1823）はスペイン・ポルトガル系ユダヤ人で証券仲買人の第三子としてロンドンのシティに生まれた。オランダのアムステルダムにあるポルトガル系ユダヤ教徒集団に付属していたタルムード・トーラー校で初等教育を終えた後、父の仕事を手伝ったが、1793年クェーカー教徒の娘プリシラ・アンと結婚。そのため父との間も不和となり、仲間の支援もえて株仲買人として独立した。実業界で財をなし、1815年に引退。執筆のかたわら、1819年にはアイアランドのポーターリンドン選挙区より下院議員にも選出された。リカードウによる経済学研究の最初の成果は「金の価格」（1809年）という小論文であるが、経済学研究に従事するきっかけは、1799年に保養地バースにおいてスミスの『国富論』を読んだことにある。この小論文を「より適切な形」に体系化したのが本書であり、そのテーマは、ナポレオン戦争下において銀行券が減価している現実を論証し、その是正策を提案することであるが、そのために、通貨「価値」に関する限り「価値」論がすえられていることが注目される。価値論こそ、リカードウが終生考えぬいた問題である。本書の初版は1810年に出版された。

5. Ricardo, David.—On the principles of political economy, and taxation. London, 1817.

本書は「金の価格」以来、リカードウが発表した小冊子等の体系的な結晶物である。リカー

ドウは体系の出発点に価値論をおき、スミスの説明の中に不明確に存在していた投下労働価値説を整理して、商品の価値をその生産のため投下された労働量によって規定する。そして、この価値量が賃金、利潤、地代へ分配されていく法則を確定する。というのも、経済発展のための蓄積元本＝利潤範疇を確定し、この発展＝資本蓄積の動向を規定する一般的利潤率の趨勢を確定することなしに、経済発展の問題は捉え切れないからである。リカードウによると経済発展が進めば、穀物価格の上昇を介し一般的利潤率は低下し蓄積の誘因は弱まる。時論的には、この点から穀物法の撤廃が要求されることになる。しかしこのリカードウの説明には、投下労働量による商品の価値規定と一般的利潤率による商品の「自然価格」規定とが「価値修正」という形で安易に同一化して捉えられており、この点は後の展開の一大争点となる。

6. Malthus, Thomas Robert. – An Essay on the principle of population; or, a view of its past and present effects on human happiness; with an inquiry into our prospect respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions. Vol. 1-2, 6th ed., London, 1826.

トーマス・ロバート・マルサス(1766–1834)は、ホリーシアのドーキングに生まれ、ケムブリッジ大学を卒業。後に修士号を得、また母校の特待校友にもなった。1798年に匿名で本書を出版すると同時にサリーシアのオールベリーの牧師補になり、後に東インド大学のイギリスで初めての経済学の教授となり、また牧師職をも兼任した。資源問題や後進国における人口の爆発に直面し、現代、改めてマルサスが呼びおこされており、既にマルサスの人口論については周知のところであろう。マルサスは、①食物の人間生存にとっての必要性、②両性間の情欲の必要性和不変性を公準、歴史の事実とし、人口は等比級数的に増加するが食料は等差級数的にしか増加しないと論じる。この点から当時、産業革命の進展と共に展開した貧困が社会制度に由来すると説いた急進主義を批判し、この問題を自然的なものに解消させると同時に、救貧法による貧民の救済をも批判し、人口の道徳的制限や農業の奨励などを提案する。見られるように問題の一面化がなされているが、この人口論は広い意味で、古典派経済学の間で共有されることになる。

7. Malthus, Thomas Robert. – Principles of political economy considered with a view to their practical application. London, 1820.

先のリカードウ『地金高価論』は「地金論争」の産物であるが、マルサスもこの論争に参加することにより両者の親交が始まる。両者は共に「地金主義」に属しつつも、為替相場の理解

については異っていた。1814年6月頃、両者の間で「穀物法論争」が始まる。既に述べたようにリカードはそれを『経済学と課税の原理』に結晶化した。他方マルサスもそれを本書に結実化した。それ故本書はリカードの「対抗理論」という性格をもつ。本書は富の定義に始まり、価値論へと展開する。スミスにみられた支配労働価値説を踏襲し、さらに商品の交換価値、地代・賃金・利潤の各所得範疇を需給原理によって説明する。明らかにリカードとは違った現象論的な思考であり、事実彼自身、リカードの抽象的、演繹的方法を批判している。そして最後に、リカードの資本蓄積論＝経済発展論を、「有効需要」の増大という十分条件を欠落させるものと批判する。マルサスはこの条件の確保を地主の消費需要に求め、穀物法を擁護するのである。この有効需要論がケインズによって高く評価されたことは周知の通りである。

8. McCulloch, John Ramsay. - The principles of political economy: with a sketch of the rise and progress of the science. London, 1825.

ジョン・ラムジイ・マカロック (1789 - 1864) はエジンバラ大学を卒業し、法律家を志したが、すぐに経済学研究へ方向転換した。また『スコツマン』誌の編集に携わったりした後、政府刊行物出版局の監督官も勤めた。この間実に多数の経済学論文を発表したが、本書は、彼の経済学を「定式化」した主著である。マカロックは、リカード経済学の擁護と普及を目指したが、かえってリカード価値論の理論的破綻を露呈させ、これをほうてきしてしまうことになる。即ち、商品価値につき、投下労働による価値規定と一般利潤率による「自然価格」規定とを一貫させようとして、自然的要因も労働し価値を形成するものと見なす。利潤は「蓄積された労働」＝資本の労賃と考えられる。こうして人間労働の観念を資本にも拡大し、両者は同一視され混同されてしまうからである。さらにこれは、価値を効用と捉える思考に繋ることにもなる。リカード経済学の俗流化といわれる所似である。マカロックはまた、『経済学文献』(1845年)の出版、初期の忘れられた経済学説の発掘・編集・出版などによっても、経済学の普及と発展に貢献した。

9. Say, Jean Baptiste. - Catéchisme d'économie politique, ou instruction familière qui montre de quelle façon les richesses sont produites, distribuées et consommées dans la société. 3^e éd., Paris, 1826.

ジャン・バティスト・セー (1767 - 1832) はリヨンに生まれたが、パリへ出、そして弟と共にイギリスに商業の勉強のため渡った。帰国後 1787 年頃、勤務先の生命保険会社の重役に紹介されたスミスの『国富論』にとっても感動した。彼の主著『経済学概論』の出版は、それが

ら10数年後の1803年であった。当時のフランスは、ナポレオンの「大陸体制」の下での産業保護主義の時代であり、経済学の文献上でも「重商主義の近代的むし返し屋」が続出した時期であった。こうした状況にあってセーは、重商主義の視野の狭さや誤謬を曝き立て、経済自由主義を打出す。彼の経済学説のうち「セー法則」として有名な「販路説」は、販売と購買が時間的にも空間的にも分離する点を見逃してはいるが、これも重商主義批判として歴史的に重大な意味をもっている。何よりも彼にとり問題であったのは、現実の経済とその政策批判であった。本書は、こうした彼の経済学の啓蒙・普及のための書である。この彼の使命感を支えているのは、「指導者が最良のプランを採用する」だけではなく、「国民がこれを受容できて」初めて、これが現実化されるという確信であった。初版は1817年刊。

10. Sismondi, Simonde de. - Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population. Tom. 1-2., Paris, 1819.

シモンド・ド・シスモンディ（1773 - 1842）はジュネーブに生まれ、フランス革命のため一時イギリスに亡命したが、トスカナで農業経営に従事する。この時の経験が処女作を生んだ。1803年『商業の富』を出版。大陸におけるスミス学説の普及に尽くすが、この時の彼の気持はセーと同様であった。その後、歴史と文学の研究に没頭するが、『エジンバラ百科辞典』の「経済学」の項を執筆した（1818年）。この時からシスモンディはスミスの普及者の域を越え、独立小生産を基準に資本制生産の諸矛盾を告発することになる。それが本書である。ナポレオン戦争後の過渡期恐慌と労働者の貧困とが、彼にこの立場をとらせた。シスモンディは「普遍的な自由競争」による「産業諸力の巨大な発展」・資本蓄積の無制限な進行を唱える正統派を批判し、政府＝「保護の権力」によるこれらの抑制を説く。この主張を支えているのが彼の生産と消費の不均衡論＝過少消費説である。つまり、年生産＝年所得と捉え、したがって資本蓄積は消費を削減させ生産（＝消費財）を拡大し、生産と消費とを乖離させるというのである。こうして、ともかくもシスモンディによって、資本主義にあっては恐慌が必然化する点が捉えられることになった。

11. Jones, Richard. - An essay on the distribution of wealth, and on the sources of taxation. London, 1831.

リチャード・ジョーンズ（1790 - 1855）はターンブリッジ・ウェルズに生まれ、22歳でケムブリッジ大学に入学。その後ケントやサセックスで牧師補をつとめた。本書の出版後、新設のキングズ・コレッジ（ロンドン）の経済学教授、また1934年にはマルサスの死後、あとを襲

って東インド大学の経済学教授となった。本書はタイトルにもあるとおり分配論（地代論のみ）をそのテーマとするが、それはリカードウ経済学を意識してのことであった。つまり、リカードウが取り上げている地代は資本主義的なそれのみであって、その底には資本主義的生産様式を絶対化・永久化する歴史認識の欠如がみとれる。ジョーンズはこの点を批判し、地球上には前資本主義的な諸地代、前資本主義的な土地所有者と耕作者との諸関係が存在すると主張する。これらの労働の社会的形態は資本主義の下でのそれとは異なる。このようにして彼はそれなりに資本主義的生産様式の歴史性・相対性の認識に迫っているのである。

12. Godwin, William. – Enquiry concerning political justice, and its influence on morals and happiness. Vol. 1-2., 2nd ed. corrected, London, 1796.

ウィリアム・ゴドウィン（1756 – 1836）は非国教徒の子として生まれ、インディペンデント・セオロジカル・コレッジ（ホクストン）を卒業後、牧師となったが、やがて1785年ロンドンに出て文筆生活に入った。経歴が示すように彼の思想形成に宗教が果たした役割は大きかったと思われるが、本書の執筆時には無神論者となっていた。本書の執筆を強く促したのはフランス革命である。もっとも彼は非暴力主義者であって、フランス革命の精神＝理性に感銘したのである。彼によれば人間の性格は白紙であって、これを色づけするのは政治的制度である。産業革命初期の貧困、小生産の没落は私有財産制度に因るとして、これを否定する。他方で分業＝共同作業は「強欲の源泉」とみなされ、これも否定される。結局、彼の立場は「人間理性の自然的発展」に基づく「独立生産者の無政府的ユートピア」といえよう。初版は1793年刊。

13. Owen, Robert. – A new view of society: or, essays on the formation of the human character; preparatory to the development of a plan for gradually ameliorating the condition of mankind. 2nd ed., London, 1816.

ロバート・オウエン（1771 – 1858）は、北ウェールズのニュータウンに生まれ、小学校卒業後すでに7歳で助教師を勤めるなど、その才を早くから発揮した。10歳でロンドンの兄をたよって店員奉公に出、やがて10代で、マンチェスターにおいて企業家となった。その後綿業王の娘と結婚、スコットランドに赴くことになるが、この地のニュー・ラナークやニュー・ハーモニー（アメリカ）において彼が主宰した「工場コミュニティ」の実験は有名である。彼は、産業革命の展開が生み出した工場制度の悪弊に心を悩ましていたのであった。本書は、そのニュー・ラナークの実験報告、また、社会改良のための政策提言などを含むが、これらを支えていたのは、本書の第1エッセエで述べられている彼独特の性格形成論である。それによれば、

性格形成において環境の果す役割は決定的に重大であり、それ故、環境を改善することによって性格の改良も可能である。オウエンは、「イギリス社会主義の父」、「協同組合の父」とも言われ、チャーチズム運動にも影響を及ぼした。初版は 1813 年刊。

14. Owen, Robert. The revolution in the mind and practice of human race; or, the coming change from irrationality to rationality. London, 1849.

本書は、『自伝』（1857 - 58）を除けばオウエンの最晩年の著作であり、ヨーロッパにおける 1848 年革命に対する彼の一つの反応とも言える。彼はこの革命の目的である「合理性と幸福」に共鳴したのである。既に彼はニュー・ラナーク、ニュー・ハーモニーの実験を行っていた。本書には、これに対する反省が盛り込まれている。「村」ではなく「町」が主張され、その設立主体も個人や法人ではなく政府である。町への入植者は旧思想を払拭した失業者であるが、自己統制され、自己の勤労で自己を養おうとする者である。これに教育機関が協力するのは言う迄もない。こうして高められた生産力は政府による一層の「町」の建設を促す。以前には「村」の生産力の上昇の結果、私的所有は消滅すると考えられていたが、ここでは、むしろそのためにこそ思想変革が重視されている。

15. Gray, John.—Lectures on the nature and use of money. Delivered before the members of the “Edinburgh Philosophical Institution” during the months of February and March, 1848. Edinburgh, 1848.

ジョン・グレイ（1799 - 1883）はダービーシアのレプトンで初等教育を受け、14 歳でロンドの製造・卸売店に奉公に出た。その年季があげると他の大商店に移った。店員として働きながら、当時彼の注意をひいたのはナポレオン戦争後の戦後恐慌とそれに伴う失業者の群れであった。その原因の究明と解決を志し、やがて独学により次々著作を公刊した。彼は当時の社会の弊害は基本的に、一方における莫大な滞貨と他方における失業者の貧困、生産と消費の矛盾にあると考え、両者を結びつける社会改革を構想した。本書は、そのために増大する財貨の生産に比例した購買力の増大を無価値な紙幣の発行により果すことを提案する。そしてそのための条件として、国内市場と国外市場の均衡、諸職業間の均衡などが考えられている。この思考の中にグレイの共同社会の構想がうかがわれる。事実、彼はオウエン主義のオービストンの協同組合組織に参加したこともあった。